

# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館 ニューズ

(財) 第五福竜丸平和協会

〒136 東京都江東区夢の島3-2  
都立・第五福竜丸展示館内  
電話 (521) 8494

## ● 100万人参観運動を!

84年11月来館者数	17,954名
通算1カ月平均来館者数	5,104名
当月1日平均来館者数	691名
通算来館者数	520,580名

## 核とたたかう人々と、語り合うために 中学生たちの無限の可能性

榛葉文枝

和光中学校(東京・町田市)二年三組の生徒たちは、昨年にひき続いて、「戦争と平和」の問題を文化祭でとり上げました。

昨年は、戦争で苦しみを味わった人たちが、どんな思いで生きていくか、ということに焦点をあてた調査研究でした。夢の島の第五福竜丸の中で元乗組員の大石又七さんにめぐりあって、この事実と思いを多くの人たちに伝えようと、パネルや写真を添えて文化祭でアピールしました。

今年はその発展として、「核」の問題に焦点をあててみました。展示テーマは、「今、地球があぶない」。

厚木基地へ、横田基地へ、横須賀へと生徒たちは足を使って、自分たちの目と耳で事実を確かめに歩きました。平和委員会へ、平和博物館へ、10・21集会へのインタビューへと、平和を願い、核とたたかう人々と語り合うために活動を開始しました。

10フィート運動にたずさわってきた岩倉務さんや橋監督にもお会いし、又被団協の黒川万千代さんからは、世界の反核運動の生々しい話を聞かせていただき、各国の反核ポスターをいただきました。

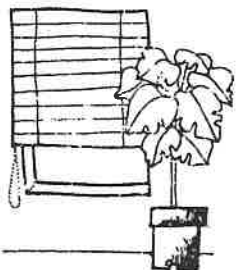
自分たちの目や耳で事実を見て歩く一方、「核——知る・考える・調べる——」(日本科学者会議編)をひとりひとりがテキストとして持ち、学習も平行して行われました。そして、遂には日本科学者会議の安斎育郎先生を招いて、中間発表会と講演会まで実現することができました。スライドを使った安斎先生の講演は、核についてのかなり質の高い話であったにもかかわらず、その歯切れのよさとわかりやすさに、一時間余、くいい入るように耳を傾けていました。

ことあるごとに展示館に相談の電話をしてみました。本館の紹介・講師の紹介と適切な助言をして下さった三尾さんには感謝の気持ちでいっぱいです。

昨年展示館で大石さんと私たちの出会いをカメラに収めて下さった写真家の森下一徹さんには、今年も「被爆者」の写真をたくさんお借りしました。展示館と大石さんは、核の問題、平和の問題を考える時、私たちの原点でもあり支えでもあることを改めて感じました。このテーマにとり組んで、二年連続「最優秀学級」との評価を得ましたが、その結果より中学生たちの考え・学び・深めるその無限の可能性に、私は心を打たれています。

福竜丸事件から三十年、重い口を少しづつ開きはじめたという大石さん、共に核兵器廃絶のために歩み続けましょう。

(和光中学校教諭)



つての藩の位置において出来上がった近代国家というのを地球に拡大してひとつの共同体として考えるのも一方法である。

そこへ行くプロセスはどうするか。私はそこに日本国憲法を考えたい。憲法の前文に「われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する」とある。この平和的生存権は、普

## ヒキニ事件と今日の科学者の課題 核戦争の危機と科学者の責任

大北 威 (広島大学放射能医学研究所教授)

ヒキニ事件は日本の放射線影響の研究を非常に推進させた。広島・長崎両市における放射線障害治療研究施設が生まれてくる背景にも当然ヒキニ事件が左右した。

一九五〇年の国政調査で、初めて原爆が投下された時広島・長崎に何名いたか大調査が行なわれた。また五一年には、広島・長崎両市は、原爆死亡者数の調査を行なった。当時はプレスコードで制限をうけており、原爆の後遺障害についての研究は日本側は必ずしも盛んではなかった。もちろん戦後すぐに日米合同調査でまとめられた

遍的権利として世界すべての人々の、非常に重要な点で、日本のピープルと世界のピープルのあるべき関係が書いてある。そういう点で日本の憲法はユニークであり先駆的である。それぞれのピープルがこういうような考えをもって、国際社会というものを乗りこえてひとつの人間社会を、人類共同体に向けて完成するよう努力していくしかないのではないか。

データの発表が許されたのは五年であった。講和条約が結ばれて、五一年の暮れに広島医学会は初めて原爆後遺障害について研究会を催した。当時はまだ放射線の後遺症にどういふものが出てくるかわからなかったわけで、はっきりあらわられていたのは原爆放射線による白内障である。それからのち、白血病が被爆者の中に多いのではないかとわかった。

五二年になって原爆関係の研究というものが、日本人の手によっても自由に研究、発表することが

許された。当時、広島・長崎市の民生委員を通じて、実際に原爆障害をもった方が、どれだけいるか調査を始めている。春には日本血液学会で、初めて原爆障害に関するシンポジウムを開いた。五三年には、原爆被害者治療対策委員会というものができて、原子爆弾による障害の治療に対する請願を国会に提出、衆参両議院でこれを採択、その年の国立予防衛生研究所に原爆症調査協議会が設けられた。

その翌年にヒキニ事件があって、その社会的インパクトは、原爆被害者に対する行政的処置の改善に大きく作用した。五月には、日本学術会議の放射線調査影響特別研究委員会が発足し、八月には広島・長崎両市の関係者が原爆被害者の治療について協議、その後、いろんな経緯を通じて五七年、原爆医療法が発足した。

さて、一九八〇年にポストンの見知らぬ人から手紙がきて、核戦争の危機が高まっているので、医者たちの立場から発言したい、アメリカ、ソ連、原爆被害について具体的なデーターをもっている日本の医者十人位で、秋に第一回のシン

ポジウムを広島でやりたいとの申し出があった。

どうして、ポストンからそういう申し出がきたかといえば、現在のIPPNNW(核戦争防止国際医師会議)の会長のひとりが助教の頃、ラッセル・アインシュタイン宣言に刺激をうけ、水爆の攻撃をうけた時に、どういふ災害がおこり、医学的観点からどういふ対処ができるか、公衆衛生学的にかまえる必要を感じて六一年に会を作った。六十年代からこの問題について具体的に活動していたわけだが、その会をインタナショナルにもっていきたいと思ったわけだ。

ポストンからの申し出には、広島・長崎のことを全世界の医者に知らせることはわれわれの義務である。そういう会議はわれわれはすすんで参加するが、広島開催は無理であると返答した。

その後、われわれの提案が生かされ、日米ソだけではなく、いろんな国を集めてやるとういうことになり、八一年三月に、ワシントンで第一回を開催、十一カ国、七十余名が参加。以来、IPPNNWの名称を正式に採択、年一度開催し、会を重ねる毎、参加国も増えている。

### 展示館は人でいっぱい、展示替も

「第五福竜丸の乗組員はいます」の写真に心こもる

展示館の十一月は寒い。貯木場を渡ってくる潮風は冷く、頑じょうな鉄の扉をガタガタ鳴らしヒューとすさまじい風が吹き込む。

#### 百二十一校が見学

そんな中、船に会いに小学生の元気な見学がつづく。百二十一校、月末の一日には二十五校をこえ、三千名近い子どもたちで館内はあふれんばかり。船を見あげ、死の



灰の恐怖を示すパネルに目を見はり、新しく展示されたヒロシマ・ナガサキの写真に息をのむ小学四年生。八王子・日野など遠く三多摩の学校からバスでの移動教室の見学がとりわけ多い。

十一月の来館者一万七、九五四名は、団体の数とともにいままでの最高となった。

#### マグロ漁もダイナミック

十一月はまた展示替の定例月。つきからつきへの見学者のきれ目をぬって、また時には閉館後作業がすすめられた。とくに二階の展望台付近を全面的に改良、マグロはえなわ漁のダイナミックなイラストを中心に、第五福竜丸の投なわ、揚なわの解説図や写真パネルを囲み、事件当時の漁業の状況、漁夫のくらしの解説、ガラス玉、

#### スペインの映画監督も

スペイン映画祭のため来日中の巨匠ファン・A・バルデム監督が

はえなわ、乗組員の衣服などを全体に配置、その苦しい労働と生活を破壊した水爆実験への怒りを新たに展示した。

保存運動のコーナーも刷新、写真パネルだけでなく展示ケースに各地の募金運動のチラシ・ポスター・パンフなどもならべ、立体的な展示への努力もなされた。

今回のハイライトの一つは「水爆被災から30周年、第五福竜丸乗組員はいます」の組写真(写真提供・毎日新聞静岡支局)。三〇年の歳月をきざみ込む乗組員一人ひとりの表情をみると、また付けられた一人ひとりの思いがにじむ説明と各地に散り多様な現在の職業を読むとき、胸せまる思いがする。この写真は、この間少しづつ整備し完成した展示館の小さい暗室で私たちの手で心こめ作った。従来から要請されていた展示ケースの新調も、地元の大工さんの手で本格的なケースが七つも作られ、展示をひときわひきたたせた。

「世界に福竜丸を知らせる映画を作りたい」と来館。日本国民が船を保存しつづけている意義は限りなく大きいと激励した。

### 私たちの文化祭—和光中学

●核戦争ある? — 島倉千佳

取材の中で一番印象に残ったのは、やはり十月二十一日のアンケート調査です。こんなにも積極的に見ず知らずの人に話しかけることができたのは、はじめてです。そして調査の結果がでた時、核戦争のおこる可能性は? の所で本当にびっくりしました。大部分の人が、ある。

やはり、おこるのでしょうか? 何人の人間が生き残れるのでしょうか。もっと多くの人たちが反対しなければ…。

●厚木にいったとき—渡辺慎一  
あつつかれた。今まで調べたことが二日で終ってしまっなんてなにかさびしい気がする。

厚木基地に行った時は夜の十一時になった。思い出せば、あの今にもくずれそうなやぐらの上での騒音を聞いて、基地のまわりにいる人が、こんなにいるさ毎日過ぎていくかと思うとかわいそうになった。それに会社が終わってからやぐらにくる人も大変だと思っただ。やぐらにくる人たちは、騒音のことで、すぐく一生(すめんへ)

### 去る七月三〇日、東京・神田の学士会館で「核兵器禁止をねがう科学者フォーラム」(第五福竜丸平和協会共催)が開かれた。前号にひきつづきその報告の要旨を収録する(次号完結)。なお要旨は録音テープから編集部がまとめた(表題・文責編集部)。



#### ピキニ事件の歴史的な意味

#### 核時代の理論と平和的生存権

栗野 鳳(日本平和学会会長)

歴史的意味という、歴史観、歴史理論、歴史哲学というテーマになるわけだが、広島大学の芝田進午さんが「核時代の歴史理論」という論文を書いている。芝田さんがこうした論文を書くきっかけとなったのは、一九七七年NGO主催の「被爆の実相と被爆者の実情」のシンポジウムで「人類はすべて被爆者である」という発言があり、芝田さんは非常に感銘をした。また、ニールス・ボーアが、以前から深い歴史的洞察をしていることにも注目した。ボーアは、開発中の核爆弾のものをすごい破壊力は人類史に大きな影響をおよぼすであろう、もしそれを使つたならば、やがて全世界的な核軍拡競争をよんで、人類絶滅になる恐れがある。アメリカ・イギリスはそれを秘密にしないで、ソ連に通報して、核エネルギーとそれについての知識や技術を共同管理すべきであるといった。芝田先生は、唯

物論に立った科学者や歴史家がマ

ンハットン計画を知ったなら、果してニールス・ボーアと同じような歴史的洞察を出来るだろうか、と問うている。

では、核時代の歴史理論の課題として、どういうことをわれわれはやらなければならないのか。この問題を私が五、六年やってきた平和研究の立場から考えてみたい。

国家権力というのは、個人に対して、どういふふうなあらわれ方をするか。戦時になると、個人に對しても国外に對しても、ほぼ絶対的な力をもつてくる。近代国家は、第一次大戦、第二次大戦、その後の東西冷戦などあったが、今ある国家間の関係は依然として、それぞれが主権をもった国家である。

一九六一年、アイゼンハワー大統領は退官演説で「アメリカには本格的軍事産業はなかったが、第一次大戦後そういうのが一部に出て来て軍部と産業界がゆ着、その力は政府にも影響をおよぼしてき

た。市民は十分監視していかねればならない」と警告している。それから二十年、現在、軍・産だけでなく、議会、行政府、さらに軍・産・学と科学技術者のかかりの者も含めまき込んでしまった。これが、アメリカの権力の中枢にある。中小諸国もアメリカとは違うが軍事独裁政権とか、かなりエリートが、国家権力を支配している。

米ソの外交関係が緊迫してくると、それを理由に、アメリカ内の権力が強くなり、それ以外の国へのしめつけがきびしくなってくる。特に、同盟関係があれば当然そうなる。また、それを口実に、中小諸国の中の権力が強まっていく。逆もありうるわけで、東西それぞれに属している中小諸国の関係が悪化した場合も超大国が介入してくる。これが現在の国家権力、国際社会の特徴だ。

では、どういう立場からそれを乗り越えていくか、解決方法はなにか。

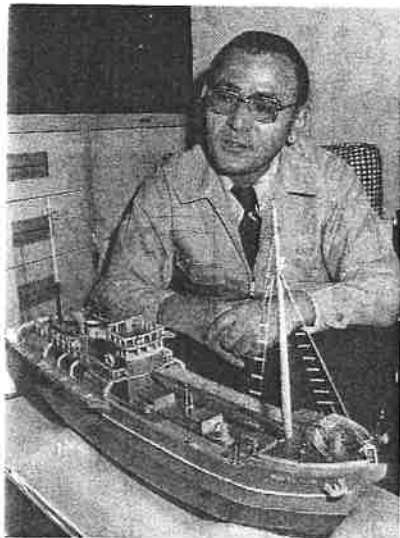
幕末に坂本龍馬は藩を自分の觀念の中で乗り越え、ひとつの近代国家のイメージを確立していった。今の日本とかアメリカの国家をか

### この船に新しい航海を

#### 第五福竜丸乗組員・大石さん船の模型を贈る

十一月末の日曜日。大石又七さん(元第五福竜丸乗組員)が両手に大事そうに大きなガラスケースをかかえて展示館を訪れた。

—お約束のものができましたよ。第五福竜丸の模型である。縮尺五〇分の一。全長約六〇センチ。木をていねいに貼り合わせた甲板・甲板。マストも舵もスクリューもアンカーもそっくりそのまま。船体番号S〇21893もある。ねずみ色とさび色で艦装。白字でくっきり第五福竜丸の名が浮んでいる。



大石又七さん語る前に船

—設計図を送ってもらって二カ月かな。仕事を終えてから毎日。午前様になったのもたびたびだね。大石さんはいま東京大田区でクリーニング店を営む。奥さんも娘さんもこの「船の建造」に協力。本業がおろそかになっては申し訳ないといつも以上に働いたよと笑う。「たより」で紹介された模型作りのベテラン宮内さんを訪ね意気投合。自分もと意欲を燃やした。完成後は展示館に寄贈の約束だった。作るのははじめてのことだがまさに入魂の作。船への愛情にじみでている。

船での仕事は冷凍士。模型を前にマグロ漁の解説がはじまる。四つの魚船の一つにっばいに氷を積んで出港、とれたマグロはきれいに洗いハトロン紙に包み、さらに布でまいて傷がつかないように

に静かに横たえ水を砕いて入れた。時には小魚を間にいれマグロが動かないように苦労する。ちょうど水に漬っているようで、毎日数回船内の温度を計った。

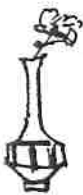
—そう、このへんから温度計をいれたんでしたねえ。模型には別に船内各部の名称の図解もつけ加えられた。船尾右舷の小さい正方形の桶のようなものは便所、船首近くには、はえなわを揚げるラインホルラー(模型ではその車輪はなんと小さなボタンのスナップ)。はえなわの束、うけのガラス玉(これはビー玉)。操縦室の窓近くに光るのは探照燈。そのすぐ下に漁鐘。船長が操縦室から身をのりだし腕をぐいとばしてめしだしたたいた。

ガラスのケースも手づくり。支えの床は波打つ海の色。全体からなんともいえない暖かさがただよ。苦しい漁とたたかい、海と船を愛した海の男が30年目に作った船。この船は「航海」すべき船だ。—模型はどこにでも持っているからね、と大石さんはつぶやく。展示した模型の横にこれも手づくりの小さな説明板が添えてある。「願う核軍縮・世界平和」の表題

(2めんより)けんめいになっていた。文化祭でまたひとつ、大きな事を学んだと思う。

●戦域核にびっくり—大熊百合子安斎さんの話しは、わかりやすくてもしろかった。メモするつもりはなかったのに、いつしゅうけんめいメモしてしまった。その中で「戦域核戦争」のことがとてもびっくりした。アメリカやソ連は戦場は自分たちに被害のないところをえらんで戦争しようと考えているなんて許せない。それから中性子爆弾を作った人は「人道的核兵器」だなんていったそうだけど「人道的核兵器」なんてあるわけないと思った。いままでも何回も核兵器の事故や核ミサイルが発射されたというまじがった情報があったというのも、よく戦争がおきなかったなあとびっくりした。

の下に一九五四年と今年の核保有国の名前と実験場のみがかかれてるのが印象的だ。ビキニから30周年、核実験はやまず今年十一月まで米英ソ中仏合計33回と近年の最高である。



### 来館者の声から

#### 声から

社会科見学の子どもたちと見学しました。ガイドさんの説明を真剣な目をしながら聞いている子どもたち。写真や展示物を見て「すごい」「かわいそう」「おそろしい」「先生みた」「みたよ、しっかり見ておこうね」と話しました。この子たちに同じ思いをさせないですむように祈りながら(八王子市立元木小学校・教師)。

平和協会の会員です。我校の修学旅行の見学コースにここを加えて、今年で四回目になっています。この約束を果たすことができるともうれしいと思っています。当分の計画は毎年続きます。\*

#### 県教組の教研集会で

平和協会の会員です。我が校の修学旅行の見学コースにここを加えて、今年で四回目になっています。この約束を果たすことができるともうれしいと思っています。当分の計画は毎年続きます。\*

「船を見つめた瞳」の九一ページに私が最初に見学したときの小文がのってあります(山形県高島町立第二中学校、太田林太郎)。

授業で広島や長崎のことをやって、核兵器のおそろしさをさんざん思い知り、これで被爆者は最後だと思っていたら、次の授業で第五福竜丸のことをやり、第三の被ばくが過去にあったのを知って何ともいえない気持ちでした。特に日本とアメリカで合同のもみ消しをやったことをとてなさないと思いました。そして久保山さんの他に、他の船の船員やビキニの人々たちの死が死の中でもとくにむざんなものだと思いました。今、ぼくたちの力で核を根絶できないのがとても残念です(N・I、十五才)。

\*

授業で学ぶよりも実際に展示館に来て自分の目で見る、確かめる方がいっつも自分の心の中に残ると思った。第五福竜丸の乗組員の写真や各自が所有していたものを見て、心がしめつけられる様な思いがし、また、原爆の犠牲者となつてしまった人々の写真から何か



私達に訴えているかの様に、また何か叫んでいる様に感じました。日本は広島、長崎に続き、第三の被ばくをうけました。つまり唯一の被爆国なのです。その被爆国が軍事国への道をたどろうとしているのは許しがたいことです。

平和は私達が作らねばならない。第二の被爆国が出ない様に、過ちをくり返さないために、平和を願いたいと思います(H・S、十六才)。

### 編集後記

▼被災三〇周年の今年を振り返ると、大石又七さんと第五福竜丸全乗組員の軌跡を追った毎日新聞静岡支局の川井、斗ヶ沢両記者のことが浮かぶ。昨年、大石さんが初めて事件のことを語った和光中学の生徒たちの中に、全盲の少女がいた。「目の見えないあの生徒に、さわらせてあげたい」—大石さんは、完成したばかりの福竜丸の模型の前で、こう語った。

▼先日、斗ヶ沢記者が大石さんの模型のことを耳にし、取材のため来館。今年の福竜丸のしめくりりにふさわしい記事になりそうだ。川井、斗ヶ沢両記者の「被ばく30年 第五福竜丸の周辺」は加筆され、来春に出版される予定とのこと。

▼「マーシャルに行ってみよう」と、ひとりの青年が訪ねてきた。新聞社の入社も決まり、来年四月からの勤務の前に二、三カ月間現地を回りたいとのこと。是非、実現してほしい。若々しい視点のたよりを「福竜丸だより」にも届けたい(は)。